

まち空間と融合した河川空間利用の実現プロセスに関する研究

Research on the process of utilization of the waterfront space integrated with urban space

(研究期間 令和4年度～令和6年度)

社会資本マネジメント研究センター

緑化生態研究室

Research Center for Infrastructure Management

Landscape and Ecology Division

室 長

Head

研 究 官

Researcher

飯塚 康雄

IIZUKA Yasuo

飛田 ちづる

TOBITA Chizuru

This research suggests the key points derived from actual cases of waterfront development integrated with urban space. The key points show approaches in each step along the promotion the collaboration among the national office of river management, river management or urban planning section in local municipality, people in community development and local businesses.

【研究目的及び経緯】

水辺の新たな賑わいづくりのため、国土交通省ではかわまちづくりやミズベリング等、近年は様々な取り組みが行われている。一方、水は人の生活に欠かせないものであり、水辺や河川等は日常生活の場であることから、河川管理と都市計画やまちづくりをともに考えることは、既に行われているといえる。

しかし、新たに水辺を含むまちづくりに取り組む際、或いは既存の水辺を活用する際の要点は、ほとんど示されていない。

本研究においては、地域の魅力の一つとして水辺や河川等をまちづくりの要素として改めて考え、水辺の整備や活用に関する具体的な取り組み方や考え方を整理することを目的とした。また、成果を資料としてまとめ、新たな取り組みの促進や、既存事例の継続に資することを目指した。

【研究内容】

本研究では、まち空間と融合した水辺空間を、地域の自然や生活、文化と深い関わりが見られる空間、もしくは、まち空間（都市域）と水辺空間が一体的に形成されている空間と定義した。また、水辺空間を意識した空間整備が行われている場合も含めた。

まず、既存事例において、国土交通省の進めるかわまちづくり、河川のオープン化事例集、その他水辺に関連する事業を水の郷百選、文化的景観等から 233 収集し、事業の目的と水辺の利用状況を整理した。その中から、まち空間と水辺の連続した利用、例えば市街地から堤外地に連続した施設の整備が行われている、或いは、整備の目的が河川管理に限らず、周辺を含めた賑わいを生み出すことを目的としている事例、及び地域の歴史や文化に基づく利用事例のうち、特徴的な事例を 43 に絞り込んだ。

その中で、他所に紹介すべき特徴を持つ事例、及び河川に先んじて周辺地域の利活用と融合させた整備を行っている港湾の事例、及び祭りに利用されている事例を含め、全 15 事例の詳細調査を行った。

研究は、水辺の整備に関する河川管理者、都市計画・まちづくり担当者、施設の事業者等の三者に対し、構想から設計と施工、維持管理までの三段階と、

日常的な活動に分けて、経緯や工夫点を聞き取ると同時に現地調査を行った。

【研究成果】

（１）資料集の構成

成果として、資料（案）は図 1 のような構成とした。想定する読者は、河川管理者、都市計画もしくはまちづくり担当者、地域の事業者の関係者の三者である。

まち空間と融合した河川空間における利用実現の要点は、詳細調査の結果から全 8 つとした。要点の内容から主に水辺（かわ）と都市（まち）のどちらに関係するかを考えた結果も示した。また、関係者が取り組む際、自分が何をするか、誰と話すかわかるようにした。全体として水辺（かわ）に関わる要点が多いものの、両方に関する、或いは都市（まち）のみにする場合も見られ、河川管理者が水辺の利用を促進して賑わいを生み出す目的を立てた場合、当該地域の都市計画、まちづくり担当者、及び施設の事業者関係者と将来構想を共有し、地域の課題があるならば、課題解決や認識を共有した事業整備が求められる。

また、各関係者が、水辺の活用を考える際に、何をしたらいいか、誰と何を話せばいいか、考える参考となるよう、冒頭に資料集の使い方を示した。合わせて、資料集で扱う水辺の種類も示した。幅広い関係者が使えるよう、一級河川に限らず町中を流れる湧水や掘割も事例に含めている。また、事例としては多くないが、水辺の施設整備に限らず、継続的な活動が求められる普及啓発も活動の対象として含めた。水辺での安全管理や、水辺における過ごし方の教育もここに含む。

（２）事業着手の背景と水辺の性質から見る特に重要な要点

詳細調査を行った事例から、取り組みの背景、水辺の種類、整備箇所を見ると、表 1 のとおりである。事例により事業着手の背景を四タイプに分けた。

①河川改修型は、河川改修あるいは水辺の整備を主体とした事例、②構想実現型は、先に都市、或いは特定の区域の構想があり、そのために水辺空間の

本資料作成の狙いと使い方

第1章 事業に取り組むための背景やニーズなど

第2章 まち空間と融合した水辺空間整備の要点

取り組みの段階	要点	主に 関係する 範囲 (※)	詳細調査事例から見る具体的な手法
日常的な取り組み	要点1 日常的な維持管理への取り組み	かわとまち	<ul style="list-style-type: none"> ・教育や地域の活動を通じた将来の担い手育成 ・伝統行事等による住民の意識醸成
構想と計画	要点2 関係者間の問題意識や将来構想の共有	かわとまち	<ul style="list-style-type: none"> ・河川整備計画における、地域固有の景観や親水性へ配慮した将来構想 ・多様な関係者が参加する検討体制の構築 ・行政主導の地域再生構想の提示による検討の推進
	要点3 将来構想を実現する道筋の検討	かわとまち	<ul style="list-style-type: none"> ・検討目的や内容に合わせた検討体制の構築 ・設計競技や住民からのアイデア募集を通じた多様な意見の取り入れ
	要点4 使い手の目線に立った検討	かわ	<ul style="list-style-type: none"> ・利活用スタイルと空間のあり方の検討、利活用体制の検討
設計と施工	要点5 まち空間と水辺空間を融合させる方法の検討	かわとまち	<ul style="list-style-type: none"> ・まち空間と水辺空間の連続性を高めるための施設構造の検討 ・散策路や親水空間の整備による回遊性の向上
	要点6 事業者、設計者、施工者間の相互調整	かわとまち	<ul style="list-style-type: none"> ・調整連絡会議等による関係者間の意見調整 ・デザインコードの共有
利活用と維持管理	要点7 公共空間活用の仕組みの構築	かわ	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の実情に応じた維持管理体制の構築 ・利活用に係る手続きの簡素化
	要点8 事業継続のための費用や人材の確保	かわ	<ul style="list-style-type: none"> ・事業協力金の徴収による維持管理費の充当 ・利活用のためのイベントの企画と運営、施設運営に秀でた人材の配置

※河川及び水辺に関する場合は「かわ」、水辺に隣接する場所に関する場合は「まち」とした。

第3章 事例集

- ・詳細調査を行った15の事例について、事業の概略や図面、事例全体の流れをフロー図に示すと共に、段階毎の工夫点を記述した。
- ・今回の詳細調査で扱わない30の事例も含めて、全43の国内の事例について主に公表資料から、概略と具体的な取り組み内容を目的別に整理した。
- ・11の海外事例については所在地、水辺の区分（河川、運河、港湾）、事例の名称と事業の背景や整備内容などの概略を記述した。

図1 資料(案)の構成

表 1 詳細に示す事例の取り組みの背景と水辺の種類、整備箇所

取り組みの背景	No.	事例名	水辺の種類	整備箇所	
				水辺	まち
河川改修型	1	石巻地区かわまちづくり	河川(市街地近郊)	○	○
	2	嵐山周辺のまちづくり	河川(市街地)	○	
	3	熊本白川「緑の区間」	河川(市街地)	○	
	4	気仙沼内湾ウォーターフロント	港湾	○	○
構想実現型	5	「乙川ウォーターフロントQURUWA戦略地	河川(市街地)	○	○
	6	美濃加茂地区かわまちづくり	河川(市街地近郊)	○	○
	7	元安川及び京橋川地区かわまちづくり	河川(市街地)	○	○
	8	長門湯本温泉観光まちづくり	河川(市街地)	○	○
構想参加型	9	北十間川かわまちづくり	河川(市街地)		○
	10	水都大阪北浜テラス	河川(市街地)	○	○
	11	尻無川河川広場(タグボート大正)	河川(市街地)		○
地域活動先行型	12	御殿堰(七日町地区)	用水(市街地)	○	○
	13	西条の水辺と祭事	湧水/河川(市街地近郊)	○	○
	14	水のみえるまちづくり(大野市)	伝統的水利用・湧水(市街地)		○
	15	柳川の掘割を中心に据えたまちづくり	伝統的水利用・掘割(市街地)		○

整備も行われた事例、③構想参加型は、先に上位構想があり、地域で水辺を使う活動を、その上位構想に合わせる、或いは組み込むような形で事業を実施した事例、④地域活動先行型は、特定の地区における水辺の利用を含めた整備、もしくは伝統的な水辺の利用を軸とした整備等の事例である。

(3) 詳細調査の事例

表 1 に示した取り組みの背景から一事例ずつ紹介する。

1) 熊本白川「緑の区間」(河川改修型)

熊本市の中心市街地に位置する白川「緑の区間」は、河岸の樹木と立田山を望む「森の都くまもと」の象徴的な場所として熊本市民に親しまれていた。川幅が狭く洪水の危険性が高かったため地域意見を長期間にわたり取り入れる体制を構築し、河川改修のあり方を検討して、堤外地での大規模な樹木の移植等を伴う、景観と親水性に配慮した河川整備を実現した(図 2)。

2) 美濃加茂地区かわまちづくり(構想実現型)

美濃加茂市では、かわまちづくり支援制度の創設をきっかけに、木曾川の自然や中山道の歴史等の地域資源を活かした、まちづくりを目指す取り組みが始まっ



図 2 河川改修型の事例(熊本白川「緑の区間」)

整備に当たり樹木の立木を含めた移植の説明版(上)も設置され、親水と景観の両立を目指した事業の経緯の一部を知ることができる。また、水辺に設けられた遊歩道は、緑豊かである(下)。

た。

事業推進に際し、国、美濃加茂市、地域団体、住民等が参画する場と組織を作り、かわまちづくりに関する

基本構想案や基本計画の検討を実施した。社会実験等を行いながら、官民連携で地域資源を活かしたプログラムを検討し、結果として「リバーポートパーク美濃加茂」(中之島公園)を整備した(図3)。現在は、バーベキューや各種イベント開催等により賑わいを見せる場所である。

3) 北十間川かわまちづくり(構想参加型)

東京都が学識経験者を中心に設立した「新たな水辺のあり方検討会」により策定された「隅田川等におけるあらたな水辺整備のあり方」が提言されたことを契機として、浅草と東京スカイツリータウンの間の水辺空間の魅力向上や動線の強化による回遊性の向上、地域活性化を目的とした整備事業の検討が開始された。東京都による北十間川耐震護岸整備と、墨田区による北十間川護岸の親水テラス整備、船着き場整備、橋梁のかけ替え、コミュニティ道路整備、隅田公園南地区整備と、東武鉄道株式会社による隅田川をわたる歩道橋「すみだリバーウォーク」整備、鉄道高架下の複合商業施設「東京ミズマチ」の整備といった、いずれも回遊性の向上に寄与する多様な整備を、関係組織や工事で相互に調整しながら実施した(図4)。

4) 柳川の掘割を中心に据えたまちづくり(地域活動先行型)

柳川城下町に広がる国の名勝水郷柳河は、高度経済成長期には汚染が進み、埋め立て計画が検討された。

昭和52年に住民との協働による掘割の浄化を念頭に置いた「河川浄化計画」を策定し、浄化事業が開始された。このときの住民参加型の掘割の浄化と再生の理念が、平成10年策定の「掘割を守り育てる条例」に活かされ、現在の持続的な体制に引き継がれている。散策路や護岸のほか、土木学会デザイン賞を受賞した柳川市民会館周辺の掘割景観デザインなど、掘割を活かした整備が行われた(図5)。また、掘割を題材にした学習や卒業式などの際に掘割に浮かぶ船に乗ってもらうなど、住民への普及啓発も行われている。

(4) まとめ

紹介した水辺空間の賑わいを生み出す事例において全ての要点に取り組んではいない。取り組み方も強弱があると考えられる。

本研究の成果は、まち空間と融合した河川空間利用を実現する目的、実現後の使い方などを具体化し、将来構想を描くために、河川管理者が都市計画やまちづくり担当者と打ち合わせる際、或いは、都市計画やまちづくり担当者が都市と水辺を融合させて、水辺に新たな活性を生み出す際、地域の事業者や住民が水辺を使った活動を考える場合、或いは、地域を流れる湧水などを用いたまちづくりを考える場合などに活用できる。

水辺は多様であり、安全管理をしながら人の生活の



図3 構想実現型の事例(美濃加茂地区かわまちづくり)

ソフトからハードへの意識を持ち、ソフトを成り立たせる施設設計を目指した。指定管理者はデザインチームを組織し、図のような行政と共に利用者が親しみやすくわかりやすい意匠を目指した。



図4 構想参加型の事例

多様な整備事業の一つである「東京ミズマチ」の例。店舗の前は歩道が整備され、川辺にはベンチが置かれている。店舗の反対側は、公園が配置されている。



図5 地域活動先行型の事例

浄化された掘割では舟運事業が行われ、地域を特徴づける風景になり、周辺は店舗が点在し、住民や来訪者が回遊する様子が見られ地域を活性化する場所の一つである。

中に位置づける際の参考となれば幸いである。

【成果の活用】

成果は、現場で活用できる技術資料としてまとめる予定である。